

養育里親

～もうひとつの家族～

22

坂口 伊都

はじめに

里子との生活もこの夏休みで丸 3 年が経ちました。里子といることが当たり前になって、これを書いている今日は、この子の 13 歳の誕生日です。せっかくの誕生日、二人で美味しいモノを食べようと企んでいます、暑くてたまらないので、夕方から母子で出かけようとなりました。明日、家族での誕生日会をするので、連チャンで美味しいモノにありつこうとしている二人です (笑)

3 という数字は不思議なもので、3 日、3 ヶ月、3 年と一つの節目になる時期と重なります。娘はよく里親家庭になった我が家を火山噴火とその後植物が再生していく過程と似ていると言います。里子が家族に加わったことで、マグマの活動

が活性化し、大噴火のマグマで大地を焼き尽くします。それまで生育していた動植物は消滅してしまいますが、新たな命が芽吹いていき、生態系を形作っていきます。我が家でもそれまで築いていた家族のバランスが消滅し、3 年かけてようやく生態系が見えてきたような感覚でいます。それまで、何回もこの子と一緒にやっていくことは無理なのかと葛藤してきました。家族になるって、どういうことなのだろう。そもそも家族とは何かはわからなくなってきました。以前に養子の子は、実子よりも思春期が 3 倍大変だという話を聞いたことがあります。里子も含めて大変なのはよくわかるのですが、何が違うのだろうと疑問に感じます。実子でも子育ては大変ですから、本当に 3 倍大変なのか、そう感じてしまう何かがあるのか気になるところです。

里親が、どのように家族となっていくのかを言葉にして整理していくと、何かが見えてくるかも知れませんが、どうぞ最後までおつきあい下さい。

家族というもの

そもそも「家族」とは何でしょうか。まず制度として戸籍があります。里親は戸籍上の繋がりはありませんので、里子の親権もありません。親権とは、未成年の子を監護・教育し、その財産を管理し、その子を代行して法律行為をする権利を有し義務を負う者となります。里親は、児童福祉施設の長と同様に監護・教育・懲戒の権限と就学の義務が明記されています。監護権の範疇で養育しているという感じです。

広辞苑では、「夫婦の配偶関係や親子・兄弟の血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団」、大辞泉は「夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活の単位となる集団」とあります。この説明は、家族の概要というところでしょうか。内面に起きる葛藤、トラブル、絆という関係性については触れられていません。内面に何を感じているかの方が「家族」としての本質があり、こだわってしまう部分なのでしょう。

もともと夫婦に血の繋がりはありませんから、家族が血縁関係かどうかを重要視し過ぎる必要もないように感じます。ステップファミリーの連れ子、養子、里子をうちの子と思って接しながら生活している方は大勢います。

私は家族を語る時、生活を共にする単位をまず思い浮かべます。そこが、日常の中の境界線になっています。実の母親であっても、親元を離れ、所帯を持つと感覚が変わってきます。

娘にあなたにとっての家族とは何？と質問すると、うーんと考えてから頼りになるものかな

と答えました。「もしかして、宝物って言って欲しかった？」とも付け加えられました。「別にその答えを求めていないけど」と返ししながら、そういう一言にこそ、大きな意味合いがあり、家族の親密さや特別感を追い求めようとしているのかも知れません。

家族をイメージする時、制度、生活文化、関係性の3つが絡みあっているように感じています。制度上では、里親と里子の関係は脆弱です。措置権者に関係を委ねざるを得ません。実際は、措置権者である児童相談所の担当者とその子を中心に据えて、どうしていけばいいのかを考えてもらっていますが、この子との生活が終わってしまうのではないのかという思いを抱く瞬間がたびたびあります。実子であれば、切れることがない責任がつきまとう感覚が強いです。

生活文化については、すり合わせがしやすい箇所だと感じます。里子との暮らしは、出産・子育ての時よりも夫婦になった頃を思い出します。どちらもお互いに違う生活文化を抱えながら、すり合わせていく行為でした。夫婦と違うのは、大人同士の恋愛関係ではなく、大人と子どもで出会って間もない関係からで、こちらの生活文化に合わせざることを前提としていたように思います。施設のように起床・就寝・食事・入浴時間等が具体的に決まっているわけではありませんから、見えにくさやわかりにくさがあったでしょう。

迎える家族側は、日々の生活の中で身につけた暗黙のルールが当たり前のようにあります。そこがわからない里子を最初は寛容に受け止めますが、段々と何故できないのと苛立ちを覚え、衝突が起きやすくなります。お風呂に入る順番やご飯を食べる時の席等、生活形態を作っていくところは自然とできていきましたが、おはよう、行ってきます、ただいま、おやすみなさい等の挨拶は、なかなかできていかない難しさを感じています。

まだ里子とは、阿吽の呼吸に至っていないように感じます。家族の中のコミュニケーションは、相手の出方がある程度予想して、言うべきか引くべきかを瞬時に判断していると思います。何かを取ってきて欲しいと頼む時、息子には何回も聞き流された経験から、言ってもしなないと思っているので頼まず、娘に頼むことが増え、娘から苦情が出ます。里子は、頼まれて嬉しそうにする時があれば、動かない時もあり、頼む前に観察をしていて、この子自身が頼まれ事をされることをどう感じているのか掴めないでいます。口を開けば、文句や誰かを卑下する言葉が並ぶので、言葉だけを聞いて対応すると売り言葉に買い言葉になり、上手くいきません。口喧嘩になると、息子も娘も口をきかなくなって、ふてくさりますが、里子は言葉での応酬を止められません。生活文化のすり合わせは目に見えて体験できますが、家族の親密な関係性は難しい部分のようです。家族と他者に対する態度を息子や娘は使い分けていますが、里子はその部分が薄いように思います。一緒に暮らしているけど、親密な関係に至らないように感じます。

親と子どもの関係

母子関係を語る中で、血のつながりにはどのような意味があるのでしょうか。妊娠に気付いた時、胎動を感じた時、出産、育児と連続して共にいる現実がありました。そこには、子どもを大人になるまで育てていく責任の重さもひしひしと感じました。初めての出産は不安でしたし、産んでからの痛みと睡眠不足との闘いは、気が遠くなり、馬のように生まれてすぐ立って歩き始めてくれたらどれだけ楽だろうと考えたりもしていました。出産後には、名づけをしていきます。どのような形で名づけるかは家庭によって違いがありますが、名づけをすることは、この子の人

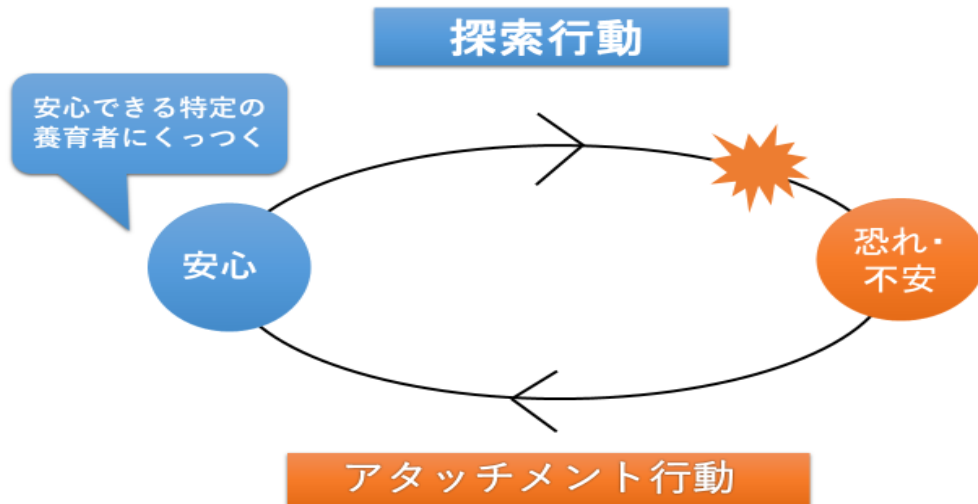
生の第一歩に同行するという意味あいになり、家族の中の一員として迎え入れるスタートラインとして意識するものなのかも知れません。もちろん、里子の名づけの時を知りませんし、名前の由来にどのような人になって欲しいと願いを込めたかも知れません。

里子は、小学校4年生の時に我が家にやってきました。年齢は10歳。10年間の里子の歴史は私はわかりません。赤ちゃんの時の様子も2歳の頃のイヤイヤ期もいたずら盛りの頃も見事に白紙のような感覚です。

ここで実子との大きな違いは、生活を共にしてきたかどうかです。遺伝的に顔や性格が似ているかどうかという感覚もあるのですが我が家の場合、兄妹で顔立ちも性格も違います。子どもへの心配する所も兄妹で全く異なり、育て方だけ左右されない部分があるのだろうと実感しています。

家族の関係性で難しいのは、親子やきょうだいの関係性を知る事のように思います。子どもにとって、衣食住に関わる存在は必要不可欠で、親がそれを担い、それを前提条件として子どもは成長をします。子どもは自分では何一つできない所から始まるので、親の存在が生死を左右する絶対的な存在として認識します。子どもは、この親の存在を優位に働かせるためにいろいろな態度や行動をパターン化させていき、アタッチメントシステムが形成されていきます。

アタッチメントは、子どもが不安や恐れを感じた時に本能的に特定の養育者にくっついて安心(恒常性)させてもらう行動で、子どもが十分に安心できると外界の世界を探索します。そして、また何か不安や恐れがあれば、養育者にくっつきに行き、安心したら探索行動と取る、この仕組みがアタッチメントシステムです。子どもがくっつこうとした時に養育者が、怖かったね、痛かったねと子どもの気持ちに寄り添ってもらうことが大事だと言われています。養育者がケア



を与えないと保護を求める感情を抑制したり、一貫しない対応の養育者に保護を求めぐずり続けたり、虐待に晒された子どもは、安心感を与えてくれる人が恐怖の根源になり、近づいたり回避したりして定まらない行動を取る等、アタッチメントシステムが変わってきます。

アタッチメントシステムには、特定の養育者がいることが土台になります。里母は、特定の養育者として、どの程度里子に認めてもらっているのだろうか、懸念を抱いてしまいます。よく信頼関係が大事だと言いますが、信頼されているように思えない場面が多々あり、関係性を築く事に重きを置くと総崩れになるような気がしています。

里子が通っている放課後等デイサービス事業のある職員の方が、里子といい雰囲気でも過ごしていましたが、里子が他の子に対して目に余る行動を取ったので、真剣に怒った時、里子が激しく反抗的な態度を取ったそうです。その方は、「里子との関係ができてから、私となら話し合いで解決ができるだろうと考えていたのですが」と、肩を落としていました。その話を聞いた時、関係性に頼る事の脆弱さを痛感しました。そして、関係性は最終目標として捉えることでこの子との暮らしに安全さが確保されるのではないかと感じました。里子は、上のアタッチメン

トシステムの図の「安心」の部分に人がいるのではなくて、モノがいるようです。モノは、一瞬でも優越感を持って、寂しさを紛らわせたり、現実逃避を手助けしてくれます。それに比べて人は何をしてくれるのでしょうか。機嫌が良かったり悪かったり、叱られたり、面白かったり、泣きながら怒ったりして、わかりにくいですね。子どもの言うことをひたすら聞いたり、ずっと遊んでくれるような人ならモノと同じような感覚になれるのでしょうか、そんな大人はいません。

ちょっと上手く回っているかなという時にも、モノにまつわるトラブルがよく起こります。モノに安心の場所を乗っ取られた敗北感。その時は、がっかりします。そこから、じっくり話し合っ、人とあなたについて確認をする。そんな繰り返しです。

親というのは、特別な存在として最終的に頼れる相手として子どもに映ります。その親に保護してもらい、安全に過ごすために、誰かから貰ったモノは親に知らせるという躰が幼児期からされていきます。親から離れる時間が長くなると、誰かに貰ったり、買ったモノを親に知らせることが習慣になっていきますが、思春期になっていくと親に隠れてモノを買い、それがみつかれば叱られる経験をします。思春期でも、誰かに

もらったモノを親に知らせた方がいいだろうと判断すれば伝えるでしょう。そして、子どもが年齢を重ねていくと、親から黙認される形でモノを所有していく。里子は、我が家に来た時からモノを隠すということを繰り返しています。決して誰からもらったとは言わない。ただ、自分のモノでないモノを所持していると理由を聞かれ、叱られるから隠す。全く隠す必要のない学校からのプリントも隠している時があります。親として容認されていないのだと感じる出来事です。

里子は、里親は自分のそばにずっといることは認識しているし、特別な人という感覚も芽生えていると思いますが、最後の砦としての存在と思えないようです。だから、里子の言動に傷つくのだと思います。母親として認めてもらえない感じは、存在自体を無視され続けながら生活を共にしている感覚に陥ります。

親というものがどのような存在なのかよくわからず育ってきた里子が、我が家で何を学んでいくのかに辛抱強く付き合っていくしかないのでしょう。私自身も1歳の時から会っていない父親に再会したのは中学2年の時で、母親から会いなさいと命令され、気が重いまま会いに行きました。出会っても全く父親という気もせず、感動もなく、面白くもなかった再会から父が亡くなるまで、父親という存在がよくわかりませんでした。父親は一番近くて遠い人という印象で、心から打ち解けた感覚ありませんし、聞きたかったいくつもの疑問も聞けずに終わりました。実子の私よりも共に過ごした時間が多く、かわいいと思っている子が他にいるのだろうという考えが消えなかったので、父の懐に飛び込む勇気もありませんでした。これも血の繋がった親子の感覚の一つです。

里子に親子関係を要求してしまうこと自体が、方向性として間違っているように感じます。親子や家族だと思って立ち振る舞おうとすると悪循環に陥り、不適切な関りを減らすことに専念

していくと、家族全体のバランスがおかしくなっていくと思います。家族としての関係性の部分では、まだまだ課題が山積しています。

終わりに

里子を家族と思えるまで時間が必要でした。里子は、里親家庭を家族と認識しているのでしょうか。家族として思ってくれていても、私が感じているものとは違うものかも知れません。里親として家族を改めて作っていく時、自身の家族概念をずらしていく必要があるのではないかと感じています。自分が描いてきた家族に当てはまるわけがないと思う方が、気が楽になります。何度も同じような行動問題を起こし続ける。落ち着いてきてもなくなる、そんな感じです。これは、里親の育て方や接し方で簡単に変わるものでもないようです。トラブルの度に落ち込み、怒り、話し合い、あなたのことを護りたいという気持ちを伝えながら過ごしています。この子にとって、里母ほど激しく、正面切って向き合ってくる存在は他にいないでしょう。里子の行動の意味を言葉にしていき、時間を置いて里子自身に考えてもらい、次からどうしていけばいいのかを考えていきます。里子との親子関係は、「けったい」で一般論では語れません。この際、けったいであると開き直り、その上で何とか家族であろうとする気持ちを持つことが大切なように感じます。家族の形は多種多様です。ちょっと外れた家族を担っていく感覚が里親にはいるのかも知れません。

Happy Summer

